

心の輪を広げる体験作文

【中学生区分】優秀作品

千葉市立高洲第二中学校 三年

## 聴覚障害者とともに生きる

松井 かな子

みなさんは、障害者についてどう思いますか。障害者を見て、何を感じますか。かわいそう、と思う人がいるかもしれません。しかし、私がもし障害者であったなら、「普通の人と違ってかわいそう」と言われているような気がして、とても嫌な気持ちになります。

私が聴覚障害について考えてみようと思ったのは、道で補聴器を見かけたことがあり、そのときに調べてみたのがきっかけでした。初めは見たことのないものを耳につけている人がいて、気になっただけでした。しかし、家族と聴覚障害の話をしてみると、意外な事実を知りました。母の知人に、聴覚障害のある子どもがいたのです。その人は、聴覚障害だからといって、ネガティブに考えたりせず、「この子なら一生やっていけると神様に選ばれたのよ。」と言っていたそうです。

これをきっかけに、私は総合的な学習で、聴覚障害について学ぶコースを選びました。このコースでは、難聴疑似体験をしたり、聴覚障害者の話を聞いたり、聴覚障害の子と交流したりします。夏休み前、聴覚障害者の講話がありました。

講話の中で、聴覚障害や手話がどういったものなのかを教えてくださいました。手話というと、新たに覚えなければいけない、難しいものだというイメージを持っていましたが、実際にやってみると、意外にジェスチャーゲームのようなものでした。手話だけでなく、空中に字を書いて伝えることもコミュニケーションの一つだと知り、私の中のハードルが少し下がった気がしました。また、事前に覚えておいた自分の名前が手話で伝わった時の感動は、とても大きなものでした。しかも、伝わって初めて、同じ「松井」という苗字であることを互いに知り、その感動も合わさっていたのだと思います。健聴者である私が当たり前に行っている、口頭での自己紹介が、こんなにも伝えることが難しく、伝わった時の嬉しさが大きいことに気付くことができました。また、疑似体験を通して想像してみた、聴覚障害によって困ることを実際に質問してみました。インターホンや電話は、音や声が聞こえて通じ合えるものだと、当たり前のように考えていました。インターホンは音の代わりにライトを使用し、電話の代わりにファックスやメールを使用しているそうです。しかも、ファックスやメールが普及する前は、人に頼んで代理で電話してもらっていたそうです。そんなことは思いつきもしませんでした。出先で急に誰かに連絡をしなければいけなくなったとき、自分が聴覚障害があること、電話をしなければいけない状況であること、その内容などのすべてを筆談で伝え、了承してもらおうのかと思うと、想像しただけでも、外出することが嫌になります。

もう一つ、意外なことがありました。それはカラオケです。松井さんは音が聞こえないか

ら音楽を楽しむ方法がなく、好きではないそうですが、今の若い人は、カラオケに行くことによって音楽を楽しめるというのです。それは、私たち健聴者が意識せずに見ていた歌詞の字幕のおかげでした。音楽に合わせて歌詞の字幕があることによって、楽しめるのだそうです。

このように、私が当たり前に触れているものがちよっとした助けになって、障害に関係なく楽しめることはたくさんあるそうです。今の私たち健聴者ができることは、思っている以上にたくさんあるのかもしれない。かわいそう、と思って距離を置いてしまうのではなく、大変さを知ったうえで、どうしたらコミュニケーションをとったり、楽しみを分かち合ったりして、ともに生きていけるかを考えていきたいです。